ありがとうぼくらの野いちご村

奄美市立屋仁小学校　四年　泉　美乃

ぼくは、奄美の天然記念物、クロウサギのヨモギ。ぼくはクロウサギの村「野いちご村」に住んでいるんだ。この村には、人間も住んでいて、人間たちはこの村を「屋仁」と呼んでいる。昔は、自然がいっぱいで、人間たちもやさしくて、ゴミ一つ落ちていないきれいな村だったんだ。しかし、最近は、スピードを出して走る車が多くなって、交通事故で死んでしまうウサギもでてくるようになった。それに、人間の子どもたちがポイ捨てをしたり、落書きをしたりしているから、村もどんどんよごれていってしまった。クロウサギたちも野いちごを食いあらしたり、道のいろんな場所でフンをしたりしている。どんどんよごれていく野いちご村をイヤになって、村を出ていくクロウサギも多くなった。

　ある日のこと。野いちご村の村長さんが、森の広場にみんなを集めて、悲しそうな顔で話し始めた。

「この野いちご村は、よごれすぎてもう住めなくなってしまった。だから、となりの『すもも村』にみんなで引っこすことになったのだ。みなさん、引っこしの準備をしてください。」

みんな、びっくりしていた。

「グズッ。そんなのいやだよ。」

野いちご村一の泣き虫、三年生のサネンが泣き始めた。すると、

「グズッ。」

みんな泣き始めてしまった。泣いていないのは……ぼくだけだった。だって、この村がなくなってしまうのはぼくたちのせいでもあるのだから。それに、野いちご村を離れる実感がなかったからだ。ぼくは、家に帰ってからも、村長の話が頭からはなれなかった。どうしたらいいんだろう……そんなことを考えながらねむってしまった。

　次の日、ぼくは学校のみんなに、

「みんなで、この野いちご村をきれいにしませんか。」

とよびかけた。でも、返ってくる言葉は、

「ええっ、もう無理だよ。」

「何したって、もう手おくれだよ。だいたい人間が悪いんだから。」

とばかりで、みんなあきらめていた。その時、六年生のアダンが言った。

「ぼくも、野いちご村を大切にする気持ちが分かる気がする。ぼくたちが、ずっと遊んできて、思い出いっぱいつまっている村じゃないか。だから、みんなでまた

昔のような村にしようよ。」

「そうだね。村をよごしているのは、人間だけじゃない。わたしたちもルールを守らないといけないんだよ。」

とサネンが言った。

「わたしもさんせい。」

「ぼくもさんせい。」

みんな同じ気持ちになって、村をふっ帰させようと計画を立てた。そして、その様子をガジュマルの樹のかげから見ていた校長先生がにっこりしていた。

　次の日。この日のじゅ業は、村のせいそう活動。みんなでゴミを拾ったり、フンを集めたり、いろんな所に書いてある落書きを消したりした。でも、落書きだけはなかなか消せなかった。そこで、ハイビスカスの花びらのあぶらをつかって消したりした。最初は、そうじをいやがっているクロウサギたちもいたけど、きれいになっていく村を見て、やる気も出てきたみたいだった。毎日、毎日、そうじの日が続いた。何日たっただろう……。やっと、野いちご村は、昔のようにきれいになっていった。

　次の作業は、かん板とポスター作り。四年生から六年生は、「クロウサギに注意！ゆっくり運転しましょう！」という車へのかん板を作った。一年生から三年生は、「ゴミは持ち帰りましょう！」という屋仁集落の子どもたちへのポスターを作った。そのかん板とポスターをいろんな所に置いていった。すると、屋仁に住んでいる人たちも、ゴミを拾って、協力してくれるようになった。

　こうして、野いちご村は昔のように安全で安心して遊べて、ゴミ一つ落ちていないきれいな村になった。すると、となりのすもも村から、野いちご村に住みたいというクロウサギたちも出てきた。

　八年後。ぼくはもうすぐ大学生。東京にあるウサギ大学へ行くんだ。あれから八年たった今でも変わっていないよ。

「ありがとう。大好きな村。」

「ありがとう。大好きな仲間たち。」

「いつかきっと、このぼくが生まれ育った野いちご村にもどってくるからね。」

ぼくは、そうつぶやいて、今にも動き出しそうなバスに飛び乗った。この日の野いちご村は、いつにもましてにぎわっている。だって今日は、野いちご村のふっ帰記念なのだから。